



図書館だより



期末考査も終わり、いよいよ年の瀬になりました。この一年間、何冊の良書に出会いましたか? 「図書館だより」でお送りした読書週間企画号も最終号。本校教職員の中で、52名の先生方からのオススメ本が掲載されました。「図書館だより」をきっかけに先生方と皆さんが本について意見や感想を話し合えたなら幸いです。ラストは第1学年の先生方からの推薦図書です。じっくり読んでみてくださいね。

樫村 敦雄
『裸の王様』

開高健著 新潮社

「開高健」と言えば「釣り」のイメージが強いが、この作品は主人公である絵画教室の講師と一人の少年の物語である。昭和の戦後社会を舞台にしたショートストーリーであるが、歪んだ社会構図やその時代の少年の心情は、現在の社会問題や家庭事情に重なる部分が多い。芥川賞受賞作品。



猪狩 昌行
『半落ち』

横山秀夫著 講談社

「私は妻を殺しました。」と出頭した元警部で現役の警察指導官。犯行は認めたものの、殺害してから出頭するまでの2日間一体何をしていたのかについては、堅く口を閉ざしたまま。彼はなぜ妻を殺したのか? それでも彼は生きなければいけなかった。その意味を知るには、ぜひこの本を読んでください。きっと命の尊さを知ることでしょう。



杉山 和則

『高校生のための文章読本』

梅田卓夫(他)編

筑摩書房

「この本は、『自分の心を自分の言葉で語る』ということ願って、高校生諸君のために編集された文章読本です。」(序文より)。生と死、恋愛、芸術、夢、言葉、自分。生きる上で誰もが抱く疑問や関心事をテーマとする多彩な著作陣の文章に触れてみよう。それぞれわずか2~3分、短い中に深い思索が伺える。私が高2のとき、担当国語教師の勧めで読んだ一冊(当時初版)。



綿引 隆

『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』

岩崎夏海著

ダイヤモンド社

数年前に爆発的にヒットした『もしドラ』を紹介します。特に好きなのが次の2か所。
「(省略)…資質が、一つだけある。才能ではない。真摯さである。」【p.18】「組織の目的は、人の強みを生産に結びつけ、人の弱みを中和することにある。」【p.121】ドラッカーの理論は、これから社会で生きるみなさんの力になってくれるはずです。



本井 睦也

『覚悟の磨き方~時代のすべての異端児たちへ』

吉田松陰著 サンクチュアリ出版



吉田松陰の教えが詰まった本です。「不器用の利点」「嫌な人は鏡」「初心の価値」など、幕末の動乱期を命がけて駆け抜けた彼の言葉には、現代の日常生活を送るうえでのヒントにも、落ち込んだ時の激励の言葉にもなることでしょう。

菅田 真文

『ディズニーランドであった心温まる物語』

東京ディズニーランド卒業生有志編

あさ出版

ディズニーランドは好きですか? たぶんほとんどの人が「好き」と答えますよね。ではなぜ好きなのでしょう? それは、この本に書いてあるような物語が毎日生まれているからなのでしょう。特別な人だけが体験できるのではなく、だれでも体験できる。それがディズニーランドのすごいところ。ぜひ読んでみてください。



水本 光樹
『家族狩り第1～5部』
天童荒太著 新潮社

崩壊しつつあるにもかかわらず、問題を軽視また無視し、放置した結果、皺寄せが来るのはいつも弱者である。大人たちはそれらに正論を並べ、説くが、自己防衛のための責任回避に過ぎない。背負うべき責任に気付き、そして負え。数年後、十数年後には家族を持つかもしれない、将来の大人たちに。



松下 仁美
『夢をかなえるゾウ』
水野敬也著 飛鳥新社

主人公は、名のある大学を出て大企業に就職。しかし、こき使われるだけなことに嫌気がさし、自分を変えたくなる。ある時、インド旅行で買ってきたインドの神様があらわれ、「自分が変わるための方法」を教わることにした。少しずつではあるが、日常生活の自分が変わり、将来が変わっていくといった内容。



河野 邦弘
『小さいことにくよくよするな!』
R・カールソン著 サンマーク

教科書。それは新しいことを学ぶ上で不可欠なもの。学校の授業では教科書があるのに、人付き合いの教科書はない。だからみんな人付き合いで悩み、心を痛める。どうすればいいかわからないから。この本にあることが全て当てはまるわけではないけれど、自分を精神的に前に進めてくれる、人生の教科書ともいえる一冊です。



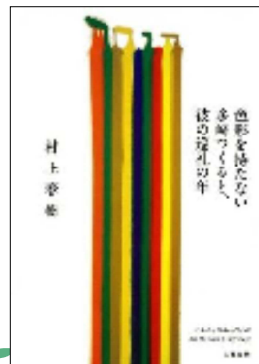
松本 茜
『面白くて眠れなくなる数学』
桜井進著 PHP研究所



生活の中に意外にも隠れている数学の話が満載です。例えば、おつりを簡単に計算するテクニックや、iPodから流れる音楽には実は数学が隠れているという話、天才数学者の逸話などなど…。数学が好きな人も、苦手な人も「へえ、そうなんだ!」と思いながら読める本です。

五月女 修

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』
村上春樹著 文芸春秋



ミーハー気分で読んでみたが、意外とおもしろかった。高校時代の仲よし男女4人に大学時代、急に仲はずれにされたある男（多崎つくると）の物語。その仲間はずれには予想もつかない理由があった。心当たりの人もいるのでは？興味を持った人はどうぞ。

泉田 泰斗
『生き物たちの情報戦略』
～生存をかけた静かなる戦い～
針山孝彦著 化学同人

作者が世界各地を旅した際に見つけた、奇妙な生態を持つ生物の紹介をおもに記してある一冊。高校の生物で学ぶような細かく、無機質な内容ではなく、実体験に基づいた生き生きとした内容なので、授業とは違う面から生物学の面白さを発見できるかもしれない。



滑川 孝則
『社会の真実の見つけかた』 堤未果著 岩波書店

2001年9月11日の同時多発テロ後のアメリカで、人々の恐怖心と競争を煽ってきたメディアの実態を実際に体験し、取材してきた著者が、「メディアリテラシー」を身につける大切さを若い世代に向けて解説しています。メディアの情報を鵜呑みにしていませんか。是非一読を。



係から…

本校図書館には、約4万冊の本があります。3年間ですべての蔵書を読む…ということは難しいかもしれませんが、1冊でもお気に入りの本が見つければと、先生方や図書委員の皆さんと選書して揃えています。借りるときにはきちんと貸し出し手続きをし、借りていきましょう。冬休み期間は5冊まで借りられます。ぜひ、お気に入りの本を見つけてください。

